
妖精の神が生きる道

ユナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精の神が生きる道

【Nコード】

N1817Y

【作者名】

ユナ

【あらすじ】

鉄骨につぶされて、転生することになった私。まあ、とりあえず一生懸命生きてみよう。あ、その前に修行だな。死なないためにも。※当分フェアリーテイル関係ないです。ものすごい下手です。それでもいいという心優しい人は、読んで頂けると嬉しいです。

妖精の神が生まれる前（前書き）

下手な小説です。それでもいいという心優しい人は読んでくれると嬉しいです。

妖精の神が生まれる前

「危ない!!」

上から声が聞こえる。何が危ないんですか?そう聞こうとしたとき、何か大きいものが落ちてくるのに気がついた。鉄骨だ。避けなくては。頭では理解している。でも、怖くて動けない。逃げなくては。逃げなくては。

ドサッ

あ・・・れ・・・?からだが・・・う・・・ごけない・・・?

「女の子が鉄骨につぶされたぞ!」「誰か!救急車を!」

大丈夫。そんな簡単なことが言えない。なんで?なんで?そして・・・私は意識を手放した・・・どこかに引っ張られるような感覚を持ちながら。

「あれ・・・?」

何故、感覚があるんだろう。私は死んだはずなのに。

「おー、起きたか。」

「だれ・・・?」

「俺はイーリス！神だ！よろしく！」

私は、とうとう頭がおかしくなってしまったのだろうか。それとも、この目の前にいる人間の頭がイカれているからなのだろうか。いや、きつとそうに違いない。

「いや、違うから！お前の頭がおかしくなったわけじゃないし、ましてや俺の頭がイカレ

ているわけじゃないから！俺、本当に神だから！」

「はいはい、それで、自称神が私に何のよう？」

意味がないとゆうことだけは、絶対にないだろう。

「自称じゃない！って、話がずれたな。話を戻そう。お前は、鉄骨でつぶされた。本当は、記憶喪失だけですんでいたはずだったんだ。しかし、お前は打ち所が悪く、死んでしまった。そこで、お前にはフェアリーテイルの世界に転生してもらう。」

「え・・・マジ？」

「うん。マジ。」

「フェアリーテイルといったら、私が一番好きなアニメじゃないか！」

「ああ、あと、そこで生きるための願いや質問は、いくらでも受け付けるぞ！」

「えーと、それじゃあね、カードキャプターさくらのクロウカード全52枚をまずちょうだい。」

「了解。あ、でもさあ、」

「何？」

「俺が出来る転生は赤ちゃんからだから、これ、どう渡す？」

「ああ、それじゃあさあ、クロウカードを私の体内に取り込んで、能力系の魔法として使えないかな。ハッピーの「エーラ」みたいにさ。」

「それなら可能だな。んじゃ、これ。」

「これ、なに？」

出てきたのは、透明な、グミみたいなもの。

「ああ、俺は、道具以外のものは、こうやって渡すことにしているんだ。」

「ふーん。ま、どうでもいいや。いただきます。」

「で、他に欲しいものは。」

「めんどいから一氣に言うよ。念じたら、その通りのものが出来る能力。あと、治癒魔法。あと、フェアリーテイルの世界での語学の知識と、様々な魔法に関する知識。あと、身体能力は、最高レベルにまであげといて。他には、アースランドで1番の魔力。そのままじゃかなり危ないから、封印できる魔法もつけといて。あと、治癒のスピードを、格段に上げといて。それと、かなり正確な記憶力。それと、フェアリーテイルのアニメの知識は、放送されるたびに頭に入れさせといて。そのくらいかな。」

「そのくらいって・・・。」

イリスが、私をあきれたような目で見る。まあ、多すぎたかもしれないな。ま、いっか。

「ああ、あとおまけがもらえるぞ。」

「おまけ？」

「そ、おまけ。俺に会いたいと思いながらねると、俺に会える。」

「ふうん。でも、何でそんなものがあるの？」

「能力を変更したかったりするだろ。その時のためだ。」

「ああ、あとさ、何で私の記憶って、あやふやなの？」

「鉄骨につぶされたとき、軽い記憶喪失になったみたいだな。」

「へえ。」

「ああ、あと、お前の名前と容姿、どうする？」

「名前はルエ。名字はどうでもいい。容姿は目と髪の色は茶色。」

「了解。ああ、あと、これやるの忘れてた。」

ああ、この透明なグミみたいなやつ、また出てきた。ま、食べよう。

「食べ終わったみたいだな。それじゃあな。」

「バイバイ。イリス。」

言い終わった瞬間、私から光りが発せられ、そのまま意識を失った。

妖精の神が生まれる前（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました！

妖精の神が産まれたとき（前書き）

前にも増して下手になってるーーーー！

妖精の神が産まれたとき

「うわああああああああん（いったゝい）」

「生まれたわ！」

「生まれたのか！」

「おめでとうございます。元気な女の子です！」

「あなたの名前はルナ。ルエ プロラスよ。」

「あゝ（へゝプロラスって名字なんだゝ）」

「あゝ（なんか、異様に眠い・

・・）」

「おい！起きろ！」

「あ、イーリス！」

「あのな、ルエ、俺、お前に謝らなくちゃいけないんだ。」

「ん、何？」

「転生の衝撃にお前が耐えられなくて、現実では眠り病みたいな状況になってしまっているんだ。」

「ふうん。どのくらい？」

「お前が産まれてから、2年と6ヵ月だ。」

「・・・うそーーーーーっ！」

「すまん・・・。」

「すまんじゃなーーーーーっ！」

「とゆうわけで、お詫びに、この空間で修行を許そうとおもうんだ。」

「もういいよ・・・」

「まあ、一応現実に戻すぞ。」

「じゃね・・・。」

前みたいに光が出て、意識が遠のいてきた。

「ああ、あと、お前の近くに他の転生者が2人いるから」
え・・・、おい

「ちよつとまでやーーーーー!!!!!!」

妖精の神が産まれたとき（後書き）

読んでくれた人、ありがとうございました！！

妖精の神が目覚めたあと（前書き）

矛盾している・・・

妖精の神が目覚めたあと

「ちよつとまでや——！！！」

あ、あれ？もしかして、現実世界に帰って来ちゃった？目さめた直後にさげんでた？

「ル、ルエ？」

この人はまさか・

「お母さん？」

この世界のお母さん、すみませーん。あのくそ神、今度会ったらだじゃおかんぞ。

「ルエ！目が覚めたのね！」

「お母さん……」

「あなた、2年と6ヵ月ほども眠ってたのよ!もう、起きないんじゃないかと思ったわ!」

「お母さん……苦しいよ……」

お母さん……力、強いよ。苦しいよ。マジで。

「あら、ごめんなさい。」

「でもね・・・会えて嬉しいよ。」

「ありがとう。あのね、ルエ、あなたに、2人、紹介したい人がいるの。」

「へー、だあれ？」

「1人はあなたと同じ年の女の子。1人は、あなたの弟よ。」

[illegible]

「おどろいた？」

おどろかない人がいたら紹介してよ。

「……その2人の名前は？」

「弟がカイト・プロラス。女の子がティナ・ルミネーナよ。」

「ふーん。2人に会いたいな。」

「本当！？それじゃあ、今から会いに行きましょう！あ、でも、そ

の前に服をきがえましょうね！」
「はい。」

「それが、10年後に至上最強とうたわれた妖精の神とチームメイ
トとの出会いでした。」

妖精の神が目覚めたあと（後書き）

ここまで読んでくださり、ありがとうございました！

妖精の神と1人目の親友との出会い（前書き）

前よりは多少うまくできたかな・・・？

妖精の神と1人目の親友との出会い

洋服に着替えた私は、3つ隣の家に向かっていた。ティナとゆう名の女の子に会いに行く。同じ年らしいけど、精神年齢は私の方が上なんだよな……。仲良くできるだろうか。でも、その子が転生者だったらまだマシかな……。 (とゆう淡い期待をかけてみる。) と、考えているうちに、着いたみたいだ。

「おじゃましまーす。プローランスです。」

「あ、いらっしやい。おや、ルエちゃん、いらっしやい！ティナ！ルエちゃんが遊びに来たよ！」

「はい！」

そうやって来たの女の子は……

「(か、かわいい！)」

お人形みたいだった。マジで。

「初めまして。ティナ・ルミネーナです。」

「初めまして。ルエ・プローランスです。」

なんとなく、私に似ていた。そして、なんとなくこう思った。

「(この子は、転生者かもしれない……。)」

「よろしくね、ルエちゃん！」

「こっちこそよろしくね、ティナちゃん！」

「あらあら、すっかり仲良くなっちゃって。」

「ティナ、お部屋で遊んで来なさい。」

「わかった！ルエちゃん、お部屋いこ！」

「うん！わかった！」

ーこれが、妖精の神と1人目の親友との出会い。

妖精の神と1人目の親友との出会い（後書き）

感想、お願いします！

妖精の神と2人目の親友との出会い（前書き）

前の話と微妙に似ている・・・。

妖精の神と2人目の親友との出会い

「バイバーイ、ティナちゃん！」

「ルエちゃん、バイバーイ！また明日ー！」

すんごい楽しかった。何でだろうな。前は人と遊ぶより本とか読んでる方好きだったんだけどなあ。

「ルエ、どうしたの？」

「ううん。ちよっと考え事してただけ。」

「そう。それじゃあ、今からカイトに会いに行きましようね。」

「はい。」

ぼてぼてと歩いていたら家に着いた。ここはどこにいるんだろう。そんなことを考えているとお母さんがドアを開けた。

「さあ、ここよ。」

入ると、ベビーベッドがあって、その中に赤ちゃんがいた。目をぱつちりと開けて、「なんだなんだ」みたいな感じで私を見ている。

「（あれ？）」「何か、違う。」

「どうしたの？」

「ううん。何でもない。」

ーこれが、妖精の神と2人目の親友との出会い。

妖精の神と2人目の親友との出会い（後書き）

読んでくれてありがとうございました！出来たら感想お願いします！

妖精の神の母の日記（前書き）

お母さんの日記です。

妖精の神の母の日記

×月十日

今日、私の子が生まれた。名前はルエ・プローランス。女の子だ。どんな子に育つのだろう。将来が楽しみ。

×月〇日

ルエが産まれてから約1週間がたった。一昨日の昼に寝てから、今日の夜になっても起きない。さすがに寝すぎだと思った私たちが医者に診せたところ、一種の眠り病だと言われた。治療法は分からないらしい。いつ、起きるのだろうか。

〇月×日

あの子が眠ってから、約5ヵ月がたった。近くに、ルエより1ヵ月遅れて産まれた女の子が引っ越してきた。ルエが起きたら紹介したい。ああ、あと、その子の名前はティナ・ルミネーナと言うらしい。

×月〇日

あの子が眠り始めて丁度1年がたった。まだ、目覚める気配は一行にない。早く目覚めてね。

□月◎日

今日、ルエに弟が出来た。名前はカイト・プローランス。元気な男の子だ。この子には、眠り病にかかって欲しくない。それに、早くルエにも目覚めてもらいたい。

◎月〇日

今日、やっと、やっと、ルエが目覚めた。カイトは不思議そうな顔をしていたけれど。

ただ、何故、「ちよつとまでやー」って。……
「！！！」と叫びながら起きたのかしら。まあ、あの２人と仲良くしてくれればいいのだけれど。

妖精の神の母の日記（後書き）

ありがとうございました

妖精の神と2人の親友（前書き）

今回は、転生者3人をいっぺんに出しますよ！あ、イーリスも含めてオリキャラ4人か。

妖精の神と2人の親友

「イーリス？あの問題発言はどうゆうことかなあ？」

「ただいま、イーリス君に質問（？）をしています。」

「ちゃんと説明します！だからその怖い笑いをしまってください。」

「ちゃんと説明しろよ。」

「まずは、カイト・プロランスから。お前が転生して約1年と2カ月ぐらいかな。間違っただけある少年を殺してしまっただけ「また間違っただけ人殺したの？」ほっというてくれ！！それで、あの世界に転生させただけ。」

「何で私の兄弟なわけ？」

「なんとなく。」

「…………… ドガッ↑私の足蹴りがイーリスのおなかにクリティカルヒットした音」

「もう1人の転生者は？」

「テ……ティナ・ルミネーナです……。」

「やっぱりねえ。」

「え、きずいてた？」

「なんとなくだけどね。」

「「イーリス？どーしたの？って、え！？」」

後ろを振り向くと。2人のお人形さんがいました。チャンチャン♪

「『チャンチャン♪』じゃないから！ルエちゃん現実見て！」

「おお。何故に考えることが分かった？」

「ティナは、読心術の能力をもらったらしいからね。」

「ふむふむ。てか、君たち誰？」

「「今更！？」」

「おお、息ぴったりだねー。」

ちなみに、今ここにいるのは私と、イーリスと、藍色の目と、ショートカットの藍色の髪を持った女の子と、黒色の目と、少し長めの

黒色の髪を持った男の子。

「まあ、今の感じから推測するに、藍色の子がティナちゃん、黒色の子がカイト君かな。」

「「正解。でも、ちゃん（君）はいらないよ。」」

おお、またもや息ぴったり。

「まあ、お茶でも飲んでゆっくり話そうよ。」

「え、ここ、お茶とか飲めんの!？」

「うん。」

「と、ゆうわけで、イーリス、お茶とお菓子♪さ、いこー。」

後ろでイーリスが「俺がお茶入れんのー!？」とかゆう叫び声をあげてたかも知れないけど、無視無視。さあ、お茶とお菓子だ♪

妖精の神と2人の親友（後書き）

次はみんなのもらった能力や前世の名前などを説明させちゃいますよ！・・・たぶん。

妖精の神と仲間達（前書き）

区別がつかない！特に、ルエとテイナの区別が・・・。

妖精の神と仲間達

「おいしー。」ただいま、お茶とお菓子中。

「さて、さっきイーリスから聞いたと思うけど、僕とティナは転生者だ。姉さんも、そうなんだろう？」

「まあねえ。そう言えば、2人はどうして死んだの？これ（イーリス）が間違って殺したってのは聞いたけどさ。」

「私は通り魔に刺されて。」

「「うわぁ・・・」」

「僕は、重度の食中毒で。」

「「げえ・・・」」

「その口ぶり、初耳？」

「「うん。死に方なんて興味ないしね。」」

「ひどっ！」

「そう言えば、姉さんは？」

「あれ？死に方興味ないんじゃないっけ。」

「私たちのしか聞かないなんて、不公平じゃん。」

「そっか。私は、鉄骨につぶされて。」

「「グロッ！」」

思いつき退かれた。

「ひどいなあ。2人のだって、充分グロいじゃん。」

「「そうだけどさあ。」」

にしてもあんた達、息ぴったりだね。前世は双子か？

「ううん。赤の他人。」

「ふーん。そう言えば、何でティナは考えてることが分かるの？」

「読心術貰ったの。前にカイトが言ってなかったっけ。」

「・・・そう言えば、言ってた。」

「「はぁ・・・」」

何よその、2人そろったあきれ顔は。

「さあ、次は能力の説明と行こうじゃないか！」

「イーリス、どっからわいてきた。」

「ここは本来俺の仕事場みたいなどころなんだが・・・」

「私が貰ったのはカードキャプターさくらのクローカードやら何やらかんやら。詳しい話はこれ（イーリス）から聞いてください。」

「スルーしないで！しかも、実行しないで！」

「いいじゃん。別に。」

「「そうそう。」」

「ひどいっ！しかもカイトとティナまで！」

「僕は、選択した魔法を無力化する魔法。」

「スルーすんなあ！」

「私は、水の造形魔法。」

「・・・・・・（泣）」

「「イーリス、お茶お代わり！」」

「・・・・・・了解・・・・・・」

「あ、そーだ。2人の前世の名前は？私は、世崎 友那。」

「ふーん。ティナは友那って名前なんだ。」

「僕は清木 海斗。」

「カイトはそのまんまなんだね。」

「うん。考えるの面倒くさかったからね。」

「へえ。私は、神月 神奈。」

「「個性的な名前だね。」」

「ねえ、2人とも。」

「「なに？」」

「ここではさあ。その名前で呼び合おうよ。姿だってそうなんだしさあ。」

「「賛成！ナイスアイデア！」」

「とりあえず、そろそろ帰った方がいいぞ。」

「「「なんで？」」」

「そろそろ夜明けだからな。」

「「それを早く言え!」」

「じゃーね、また夜にね。友那、海斗。」

「うん。」

そして、私たちは意識を失った。

妖精の神と仲間達（後書き）

次は、みんなのプロフィール書きたいなあ。

妖精の神の現実（前書き）

短い！しかも、プロフィールじゃない！

妖精の神の現実

「くわあ ああ ああ。」

「あら、ルエ、おはよう。」

「お母さん。おはよう。」

あんまり寝た感じしないなあ。そりゃあ、一晩中話し込んでたんだけどさ。

「あ、姉さんおはよう。」

「うお。カイト、おはよう。」

「さあ、朝ご飯を食べましょう。」

「はい。」

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
84

～テイナ宅～

「ティナー。遊びに来たよー。」

「あ、ルエとカイトー。来てくれたのー？」

「うん。」

「さ、ルエちゃんにカイト君。ティナの部屋に行きましょう。」

「はい。」

「何する？」

「じゃあさあ、かくれんぼは？」

「……ティナって意外と子どもっぽいんだね。」

「ほつといてよ！それにさ、たまには子どもらしい行動とらないと、お母さん達が心配するじゃない！」

「……『行動をとる』なんて言葉を使っている時点で心配され

ると思う。」

「ひどいよお・・・（泣）」

「しょうがないな。かくれんぼでいいよ。」

「やった！」

「その代わり、鬼はティナね。」

「はい。」

くかくれんぼ終了・夕方く

「ルエ、カイト、帰るわよー。」

「「はい。ティナ、また明日ー。」」

「明日ー。」

妖精の神の現実（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました！

妖精の神と魔法（前書き）

「」は、魔法カッコです。

妖精の神と魔法

「灯「グロウ」。」

えーと、今、あのよくわかんない空間で魔法の修行中なんだけど・

・

「何でこんなに数が少ないの・・・？」

きちんと前に言う呪文？みたいなもの言ったときにはいっぺんに50個ほど出たんだけど・・・

「何で8個ぐらいしかでないのよ」

ぐでぐでって効果音が似合いそうだね。

ちなみに今は、「神月神奈」じゃなくて、「ルエ・プローランス」。何故かというといーリス曰く『あの姿にした理由は、話しにくいだろうと思ったからだ。あの姿になりたいと思ったら、簡単になれるぞ。』

らしい。

「まあ、アニメほど魔法を使うのは簡単じゃないってことだよ。」

「そりゃあそうかも知れないけどさあ、何でいっぺんに25分の4ほどになっちゃうのさ。」

「「知らない。」」

「うう。2人そろってひどい。」

「まあ、頑張ればいいんじゃない？」

「だから頑張ってるんですよー。」

「明日からは私もやるし、そろそろ休憩したら？あんまり根を詰めすぎるのも良くないよ。」

「うん。でも、カイトはやらないの？」

「僕の魔法は誰かが魔法を使えるようにならないと修行できないんだよ。」

「あ、そっか。」

「「今気づいたの？」」

「うう・・・」

「話し中失礼だけど、そろそろ夜明けだからなー。」

いやー、イーリス、すっかり【夜明け告げマシーン】になってるな
ー。

「じゃ、またあとでねー。」

「あとでねー。」

妖精の神と魔法（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました
感想、お願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1817y/>

妖精の神が生きる道

2011年12月2日17時50分発行